千葉寺地区鷲谷津遺跡B区において
検出された合口甕棺墓について

福 田 顕

I はじめに

千葉寺地区の調査は昭和60年より行われ、鷲谷津遺跡B区は61年度に確認調査が、また昭和62年度の6月から12月まで本調査が実施された。住宅・都市整備公団による千葉寺地区の開発にあたって当センターの発掘調査は、本遺跡のほかに中野台遺跡、敷島塚遺跡A区、鷲谷津遺跡A区の調査がおこなわれた。

本遺跡において、合口甕棺墓が一基検出され合号跡としていたが、先例などから検討すると、火葬墓と思われる。火葬墓は一般に、一部を除いて埋納施設が貧弱であるため、偶然の発見による例が多いため、埋納施設がとらえにくく、骨壷器の研究が先行してきたようである。近年の発掘調査数及び規模の増大は上の事情を克服し、火葬墓の研究に大きく貢献していると思が、本例も当センターの発掘調査中に検出したもので、埋納施設する土壌の形態も、骨壷器の形態ともに遺存が良好な資料であり、紹介することにした。

II 遺構の検出状況

鷲谷津遺跡B区は、千葉市千葉寺町351－1に位置する。東京湾に流れ込む川は冲積平野を経たが、その水系に属する「千葉寺谷」と総称される樹枝状谷のやや奥まった台地の縁辺に本遺跡が立地する。位置図は本誌17頁の第2図を参照されたい。海抜20～27cmほどの低い台地だが、雨天の条件が悪くないかぎり海が眺望できる。遺跡からは縄文時代早中期の遺物包含層、壇の、古墳時代から奈良・平安時代にかけての住居跡、方形周溝遺構などが検出された。

102号跡としたこの合口甕棺墓は、遺跡中央の094号住居跡のプランを検出した際に確認したがこの段階では黑色の不整形のプランであり、木の根が多く入っていたことから塥乱し判断し、094号跡の調査を先行させた。そのため土壌の上部約20cmを損失してしまったが、幸い天井部は残り、また住居のセクションがこれかかっていたので土壌独自のものははずれが新旧関係をおさえることができた。ちなみに、住居跡は古墳時代前期の壇を持ってるものである。

土壌の開口部は長軸130cm、短軸75cmの長円形で、深さ51cm。北東側に下端の天井部をもつ。南西側の壁はゆるく立上がり、上部にうつるにつれ直立していた模様である（第1図）。その形態は有天井土壌を呼ばれるものに似ている（図1）。しかし規模はそれと比べてかなり小さい。

庇の下に身を寄せ2個の土師器壇が土壌底部から、倒立で口を合わせた状態で出土した。庇の中には、ひびなどから浸しに入った細かくさらした土が1/4ほどたたまっていた。取上げの際には観察した限りでは骨及び骨粉、墓誌となる遺物はなかった。セクションから人為的にやや無造作に埋められたことがわかり、外容器の底面は認められない。又覆土中には木炭粒や骨はみられなかった。

III 遺物について（第2図）

便宜上2個の庇のうち南東側のものを（A）、北西側のものを（B）とする。

土師器壇（A）完形、口径24.4cm。底径4.6cm。器高28.6cm。最大径は口縁にある。調整は口縁部がヨコナデ、胴上半部が横方向、下半部が縦方向にヘラケスリされている。器壁の薄い「く」の字状口縁部形態をもつ。色は黄赤褐色。焼成は良好だが脱土に砂粒を多く含むため表面はもろい。内部に明瞭な輪積窯をのこし特に底部と胴部の接合部は着しい。

土師器壇（B）完形、口径24.6cm。底径4.5cm。器高29.2cm。最大径は口縁にある。調整は口縁部がヨコナデ、胴上半部が横方向、中半部が斜め方向、下半部が縦方向のヘラケスリである。形態等は（A）と同じである。長年の土圧によるものか焼成時すでに歪んでいたものか不明だが、口縁が検側形となっている。胴部に意味不明の微かな線刻が

(389)
ある（第3図）。

共に「武蔵型」と呼ばれる製の形態である。製の形のため、時期決定がいささか難しいものと思われるが、8世紀第4四半期から9世紀初頭（註2）のものと思われる。

また、共に内面の下になっていた部分は褐色で、剥離しているが、かつて納められていた遺物の成分によるものか、土の成分によるものか不明である。

IV 問題点

埋葬形状

骨壷器埋納の方法は、前述した通り製を倒位とし合口製棺状にしている。この「合口・倒位」の方法は東北から近畿に至るまで、少ないのでいくつかの例が報告されている（註3）。長野県松本市（註4）や岐阜市（註5）周辺にはややまとまって見受けられるようであるし、東京都八王子市でも奈良時代のものが報告されている（註6）。栃木県南河内町下野薬師寺跡から出土したものは寺域外であるが、寺院と隣接して後述する仏教との関連が気になるが、9世紀とされる（註7）。

ところでこれらと異なり、合口といってもふたと身のように正にあわさっているものが大変多く報告されている。東京都調布市上布田第6地点（註8）、多古工業団地内薬師遺跡（註9）をはじめ関東各地や県内でも報告はますます増えており、これらは入れ子状のものもふくめ、本稿の
「合口・倒位」の方法と安易に同じくできないと思う。量的にも大きく差が開いているし、「合口・倒位」であることは「合口・正 逆位」のふたと身の関係を違って左右の胸への骨の振分けの仕方や棺の密封の技術が異なると思うるからである。例えば「正 逆位」であれば、身を組立てされれば簡単に埋納できるが「合口・倒位」ということはあらかじめ接着あるいは紐でからめておくかしないと埋納しきれない。松本市筑摩の例では「やや枯質な土塊に保持させて接合」とされている。

第2図 使用例（実測図は1/4）

第3図 意味不明の線刻（1/2）
千葉寺

火葬場は仏教思想と切り離して考えられないが、その点では、町名の所以にもなる千葉寺観音堂を紹介したい。当寺の縁起によれば、(昭和)709年（和銅2年）池田福に立寄った行基が弥陀観音像を精舍に安置したのがはじまりで、その後724-748年（神亀元-天平20）には寺家数十か所、堂室18間本堂18間4面の一大伽藍をおこし海照山善慶院栖遠千葉寺と号したという。1160年（永暦元）雷火のため灰燼と帰したので西方8万ばかりの地に一字を建立したのが今の寺地であるとされて、隣接の遺跡名として使われる観音塚あるいは位置は不明だが圏谷という字名がその遺跡であるとしている。しかしながら、戦前、戦後の発掘調査成果によれば、現地に仏舍利が建立された(即ち群立した)のは縁起よりかなり以前にさかのぼり、奈良時代末から平安時代初頭のようなものである。本堂が営まれた時期と重なるところがあり、大変興味深い。

V おわりに

遺跡の周辺に当該時期の火葬場が検出された例は無く、裏合についても遺物等の細かな検討をしていないので、寺との関係など多くの疑問を残している。

近年、火葬場を群立させ、支配者が家族の慕慕的な意味付けをする研究が進められているが、そのことをふまえ密に推測すると、ここに単独で葬られた者を僧侶であるとしてもよいのではないかと思う。

この台地とその周辺には以前から集落が営まれていた。あるとき、いかななる寺があやかしが造られ、さらにあるとき、誰かが死んでこの台地に墓がたてられた。同時期に集落と寺という三つの要素が存在したからといって、すぐさま有機的なつながりを求めるのは危険である。物語としてなら千葉寺へに殉じた僧の死を彼ら、海と寺の見わたせる台地の集落に厚く葬ったとしてみたいところである。残念ながら、現段階では今後の課題とし周辺の資料の増加を持って検討するべき問題であろう。

以上まとまりなく説いてきただ。このことについてお世話になった多くの方々にはここに名前を挙げることができないが、厚く御礼申し上げます。

注
1) 渡辺修一「群地区画史」の終焉期 (2)－「方形周溝遺構」における埋葬施設の新例とその検討－研究連絡誌第14号
2) 言葉考古学会「討論奈良時代前半の須恵器編年とその後」資料 1979
3) 神奈川考古学会「シンポジウム奈良・平安時代土器の諸問題－相模国と周辺地域の様相－」神奈川考古第14号
4) 田村茂作編「新版仏教考古学講座」7 昭50-9
5) 桑原健「松本市筑摩出土の火葬壷について」信濃 7巻4号 1955.4
6) 岡村・和田「一種の合口壺の出土した松本県宮川遺跡に就いて」考古学雑誌昭21・5
7) 東京市教育委員会「北原遺跡」1979・2
8) 八幡一郎「武蔵川口村発見の一幢」人類学雑誌44-2 1929
9) 橋本澄朗「下野の骨塚器について」栃木県立博物館研究紀要1 1984
10) 河瀬清「調布市上布田遺跡の調査」考古学ジャーナルNo21 1983・6
11) 萩原・間宮・中野「多古工業鶴田遺跡群発掘調査報告書」1986
12) 千葉県史編纂委員会「千葉県史料編1 昭51・9

参考文献（著に掲げたもの以外）
長谷川厚「歴史時代修墓の成立と展開(1)」『古代』75・76 昭58・12
「同(2)」『古代』84 昭62・9
村田・増子「南武蔵における古代火葬骨壇器の一様相」『川崎市文化財集録』15 1979
小林克「平安時代火葬墓の性格とその背景」『史叢』37号 昭61・6